

ISSN 1349-2306

民族社会研究

第9号 2018

記念論集：文化人類学と実践

広島大学
民族社会研究

民族社会研究

第9号

2018年

記念論集：文化人類学と実践

巻頭言	田川 泉	(1)
人生はフィールドワーク ―文化人類学からのメッセージ―	佐野 (藤田) 眞理子	(3)
人類学における「教育」と「実践」―フィールドにおける日本語教育の事例から―	田川 泉	(18)
観光まちづくりと文化人類学 ―文化人類学が観光まちづくりに果たす役割について―	川崎 和也	(34)
文化人類学的研究における卒業アルバムの活用に関する一考察	大久保 豊	(50)
小・中学校におけるリスク対応に関する文化人類学的研究 ―災害リスク情報に対する教職員と保護者の対処を中心として―	村田 吉弘	(69)
高等教育におけるアクセシビリティ支援に関する人類学的アプローチの可能性	岡田 菜穂子	(88)
執筆要領		(103)
編集後記	岡田 菜穂子	(105)

巻頭言

この度は佐野(藤田)眞理子先生が定年退職を迎えられることとなり、先生も創設に携わられた『民族社会研究』にて「記念論集：文化人類学と実践」を組むこととなりました。佐野先生は1992年に広島大学に着任されました。それ以来、私たちは授業のみならず、日々の会話や、多忙な予定を次々となされていく先生の姿から多くのことを学んで参りました。

振り返ってみますと、人類学者としての佐野先生は、いつもご自身のマイノリティ性を意識されていたように思います。ご自身のご成長過程の経験からも、また研究者としての出発点となったスタンフォード大学でも、日本人留学生として、また女性研究者として、ご自身の研究を切り開いてこられました。アメリカ社会におけるマイノリティとしての高齢者に着目された研究も、そのような背景によるものではないでしょうか。日本での就職も、海外で学位を取得した女性研究者として、その道を切り開いてこられました。「女性研究者は自分の将来は自分で切り開いていかなくてはならない」と話されていたことは、今でも記憶に鮮明です。まさにご自身の経験からのご忠告であったと思っております。

このような佐野先生のご自身の歩みと人類学研究は、人類学者の人生経験が自分自身の研究に如実に反映されることを物語っています。ご出産を控えてのフィールドワークの経験談は、私にとっては目から鱗のお話しでしたし、育児をされながら研究・教育を続けておられる先生を目まぐるしい一日は見ていてこちらが気が遠くなりそうでした。しかしこのような時々の研究は決して不利に働くのではなく、その時だからこそ繋がるネットワークがあるのだということも教えて頂きました。

佐野先生が障害学生修学支援に係わられたのも、このような学究の上にたつものと想像するに難くありません。広島大学に障害学生の支援を目的としたボランティア活動室が設置され、その室長に佐野先生が就任されたのは2000年のことでした。当時、障害学生の受け入れもままならなかった現状を見直し、そこに何が必要なかを障害学生の視点で明らかにしていかれたのは、まさに文化人類学の手法を生かすものでしたし、その解決に向けて支援活動を制度化していかれたのは、人類学の実践に重なるものでした。2008年度には、全学組織としてアクセシビリティセンターが新設され、佐野先生が初代センター長に就任されましたが、これは実践の人類学の日本における顕著な成果といえるでしょう。

佐野先生のご指導を受けて、数多くの学生と院生たちが広島大学を巣立ち、それぞれの場で先生の教えを生かし日々切磋しております。それは佐野先生が文化人類学を通して教え子に伝

えられたそれぞれの場面での実践であり、今回は実践と人類学に関わる論集として、ここに新たな実を結びました。佐野先生のもとで博士号を取得した卒業生からの、これまでの実践についての報告ではありますが、これを新たな出発点とし、これからも佐野先生からの教えを受け継いで参りたいと思います。

田川 泉

『民族社会研究』論文執筆要領

1. ワープロ原稿を原則とする。
2. B5 サイズの用紙に、1 頁に 42 字×32 行でプリントアウトする。
3. 文字は原則として新かなづかい、アラビア数字を使用する。
4. 注は、該当部分の右肩に数字を付し、脚注とする。
5. 引用・参考文献は、本文中または注の文中に、[]に入れて、著者名、刊行年：頁数を明記する。再版の場合は、初版発行年を()内に記す。
〈例〉 と述べている。[Lynd & Lynd 1956(1929)]
同一文献から何度も引用する場合も、ibid. 上掲書などとせずに、上記方式をくり返す。
6. 文献目録は、論文末に一括して下記方式で作成する。
 - 6-1 文献の配列は、著者名のアルファベット順とする。但し洋書と和漢書の数が共に多い場合は、別にまとめる。辞典、新聞・雑誌、などは、別にまとめてもかまわない。
 - 6-2 訳書を用いた場合、原書名を()内に併記する。
〈例〉
マーカス、ジョージ・E、フィッシャー、マイケル・M・J (永渕康之訳)
1989 『文化批判としての人類学』東京：紀伊国屋書店。(George E. Marcus and Michael M. J. Fischer 1986 *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*, Illinois: the University of Chicago)
 - 6-3 記載順は、著者姓、著者名 (イニシャルでも可)、刊行年、論文名、書名・誌名、巻、号、頁、出版地：出版社、とする。(出版地は略してもかまわない。)
 - 6-4 和漢書の論文名には、「 」を、書名・誌名には『 』を用いる。欧文論文名には、“ ”を、書名・誌名には、イタリック体またはアンダーラインを付す。
〔例〕
山口 昌男 編著
1983 『見世物の人類学』東京：三省堂
江淵 一公
1983 「象徴体系としてのニュー・エスニシティ—アメリカにおける民族活性化

運動の社会人類学的分析への一視角―『儀礼と象徴―文化人類学的考察』
江淵・伊藤編 515-542 頁 九州大学出版会

Babcock, Barbara

1986 “Modeled Selves: Helen Cordero’s ‘little people’”

In *The Anthropology of Experience*, Victor Turner & Edward
Bruner (eds.) pp.316-343, Urbana and Chicago: Urbana
University of Illinois Press.

7. 表、図または図版の番号は、表 1、図 1、または Table 1、Figure 1、Plate 1 とする。
キャプションを付け、引用の場合は必ず必ず出所を明記する。
8. 章、節などの構成及び上記意外の執筆要領については、編集委員の指示に従う。
9. 以上の執筆要領は、2003 年度出版分から適用する。

『民族社会研究』論文執筆要領細則

1. ページ設定余白：上 35mm、下 30mm、左 15mm、右 15mm
2. フォントおよびサイズ設定他
 - 《文字》日本語：MS 明朝、ローマ字：Century
 - 《主題》12 ポイント、太字、中央揃え
 - 《副題》10.5 ポイント、太字、中央揃え
 - 《著者名》12 ポイント、標準、中央揃え

 - 《本文》10.5 ポイント、標準、両端揃え
 - 《見出し》10.5 ポイント、標準、中央揃え
(章の番号：アラビア数字、全角、節の番号：アラビア数字、半角)
 - [例] 1 はじめに
 - 1.1 本研究の目的
 - 《脚注》9 ポイント、標準、両端揃え

 - 《文献目録》10.5 ポイント、左揃えあるいは中央揃え
 - 《メールアドレス》10.5 ポイント、中央揃え
 - 《ランニングヘッド》8 ポイント

編集後記

『民族社会研究』第9号は、広島大学大学院総合科学研究科で教鞭を執った佐野（藤田）眞理子先生の定年退職に際して、佐野先生と、先生のもとで博士論文を執筆した卒業生が「記念論集：文化人類学と実践」に寄稿するかたちで発行に至った。

佐野先生にご指導いただく中で、印象に残っている言葉は多い。

一例を挙げるなら、「抽象と具体の行き来は、文化を読み解くうえで重要な行為なのだ」という言葉をかけていただいたことがあった。抽象と具体とは、概念と言動、場合によっては理論と実践、あるいは理想と現実という言葉に置き換えることが出来るかもしれない。

今回『民族社会研究』に寄稿した卒業生たちは、研究や教育、支援、業務、それぞれの実践の場に身を置く面々である。寄せられた原稿は、いずれも実践経験をもとにした意欲的・挑戦的なものである。試行的な内容なだけに、私を含め議論が十分とは言えない部分も見受けられ、この点については、各自が反省しながら今後いっそう建設的な努力を続けていく必要がある。ただ、みなが意識的に、時に無意識のうちに、日常実践の中で抽象と具体の行き来から、気づきや学びを得ているのではないかと思う。引き続き、目の前のフィールドに真摯に向き合う姿勢を忘れずにいたい。

このような学びを与えてくださった佐野先生、そして広島大学総合科学研究科人類学研究室の先生方に、改めて御礼の言葉を述べて、編集後記としたい。

今までご指導いただき、ありがとうございました。

『民族社会研究』編集部「第9号」編集責任者
岡田菜穂子（山口大学学生特別支援室講師）
(E-mail: nahokoo@yamaguchi-u.ac.jp)

執筆者紹介

- 佐野（藤田）真理子 広島大学 大学院総合科学研究科 教授
- 田川 泉 Department of World Languages and Cultures,
School of Liberal Arts,
Indiana University Purdue University Indianapolis
広島大学大学院社会科学研究科 博士（学術）2003年3月
- 川崎 和也 神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科
広島大学大学院社会科学研究科 博士（学術）2013年3月
- 大久 保豊 広島大学大学院総合科学研究科 博士（学術）2013年3月
- 村田 吉弘 広島市立古市小学校
広島大学大学院総合科学研究科 博士（学術）2015年7月
- 岡田 菜穂子 山口大学 学生特別支援室
広島大学大学院総合科学研究科 博士（学術）2011年9月

民族社会研究 第9号
2018年3月1日 発行
発行者 広島大学『民族社会研究』編集部
〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1
広島大学大学院総合科学研究科

HIROSHIMA JOURNAL OF ETHNOLOGICAL STUDIES

No.9

2018

Special Feature: Anthropology and Practice

ForewordIzumi TAGAWA HARRIS (1)

Life is fieldwork:Anthropological messages
.....Mariko (FUJITA) SANO (3)

Education and Anthropology in Practice
Teaching Japanese as a foreign language in a field society: A case study
.....Izumi TAGAWA HARRIS (18)

A study of Anthropological approach to Tourism-based community
development activitiesKazuya KAWASAKI (34)

An examination of the usefulness of the school year book
in the study of the cultural anthropologyYutaka OKUBO (50)

An Anthropological Study of Risk Management of Disaster Response
at Elementary and Junior High Schools
..... Yoshihiro MURATA(69)

A study of Anthropological approach for Accessibility support
in Higher Education.....Nahoko OKADA (88)

Notes for Contributors.(103)

Editorial Notes.....Nahoko OKADA (105)
